

海國兵談第十六卷

(現代語訳)

略書

文武は天下の大徳であつて、その一方に偏り、一方を廃するようなことがあつてはならない。礼儀と秩序、刑罰と政治、全て国家を統治することは、文でなければ程よい結果にはならない。その一方で暴虐を討伐して国家の害を除くことは、武でなければ叶えるのが難しい。そもそも国家を統治する者は、刑罰を設けて非道を禁ずる。おそらく兵とは刑罰の最も大規模なものであろう。それゆえに、先王はしばしば兵の事を語っていた。又、湯王とうおうは商を興し、文王・武王は周を興したが、皆十分に武を用いたのであつた。我が神武帝が初めて国家統一の偉業を達成されて人々を統治なされてから、神功皇后が三韓を臣服せしめ、太閤(豊臣秀吉)が朝鮮を討伐して、今の世までも、我国に服従させていることなども皆、武徳の輝けるところである。そうではあるが物には本と末がある。文は武の本である。文を知らなければ武の本質を会得するのは難しい。近頃、今川了俊(鎌倉時代後期から南北朝・室町時代の武将、守護大名)が「文道を知らず、而して武道遂に勝利を得ず」と云つたのは、文武一致の趣意を理解している言葉であり、俗人の見識からすれば、殊勝ではある。そもそも兵には二つある。国家を安らかにするために兵を用いる者がある。利欲を恣ほしいままにするために兵を用いる者がある。そこで乱暴な者が出てきて民を悩まし、国家を動乱する時には兵を出し、武威を示してその暴客を討伐し、国家の害を取除く。これが政治のために兵を用いるというものである。その他にも一揆の徒が武装して紛争が起きることがある。あるいは恨みに因つて不意の軍を起こし、又は外国から来て襲う事もある。これら全て

が不慮の動乱であることから、平素から武を忘れないことが国家の主たる者の慎み（＝義務）であり、これこそが兵の正しい一面であり、武備のあるべき姿である。そこで司馬法にも「天下安らかといえども、戦を忘れたならば、則ち必ず危うし」と云っている。こうしたことから思えば、武は天下の大徳であることは間違いない。この趣意を十分に理解して、各人がその禄に応じて、備を弛めないのである。又、利欲を恣にして人の土地を貪り、あるいは私的な恨みから武力を動かす、又は人の富貴を羨んで妄りに兵を出し、徒に人を殺戮し、国家の患いをなす、これを国賊と云うのである。この二つをよく理解することで、国家の主たる者は武の本質を失ってはならず、かつ武の本質を会得するには文に拠らねばならない。文は書を読むのを基本とする。広く書を読めば、和漢古今の事情に達し、利害得失を判断できるので、誰が伝授するともなく、自然と文と武の本体を会得するのである。これらは私が根拠も無く云っているのではなく、日本や支那における英雄の教訓である。この理に拠って思えば、一国一郡の主である者は、文武の道に暗ければ尸位（＝屍に与える位）、素餐ただぐいという者である。慎重であらねばならない。

○上述したように、人々の主たる人は、臣下に文と武の二つを教えることが本来の職分であるが、その職分を知っている人の主は少ないものである。その上、異国における文武講習についての話、又は我国においても淳和奨学、鼓吹司・軍団くすいしを置いて、文を教えていた話などはしばしば演説しているが、皆昔話として聞くだけで、これを当世に興し、施して、備をなさんと思ひ立つような人主はこれまで一人もいない。その訳は、幼主に文武の二つを教える父君と家老とがないので、その成長につれてそれぞれの幼主の物好き次第で、あるいは遊び好きになるもあり、武芸好きになるもあ

り、詩文好きになるもあり、茶好きになるもあり、狩好きになるもあり、勤め嫌になるもあり、国政嫌いになるもあって、各面々それぞれである。巻初でも述べたように、物には本と末があり、人主の本末を言うならば、文を学んで国を治め、武を盛んにして国を強くすることが本であり、茶の湯、狩猟等の雑事は末である。そうであれば、この末だけを知って、本を知らないように育てることは、父君と家老との過ちであって、最も悲しむべきことである。末である雑事を行なって楽しむことも、至極の悪行と云うほどではないけれども、始めに云ったところの戸位しひとただぐい素餐の類あるから、先ずは本（である文武）を身につけてから末の雑事を楽しむようでありたいものだ。ここで語ったことは、武政の趣意であり、国の存亡に関わるところであることから、このようにこれを記すのである。人々は本末をよく弁わきまえなければならぬ。

○右に述べた鼓吹司、軍団等の事を当世に施行行なうとしても、さほど難しいことではない。そうではあるがよく理解していなければ、異国の辟雍、泮宮（いずれも西周時代に設けられた支那の高等教育機関）等の図式にとらわれて、その建立が甚だ難しくなり、終には中止されることもあるだろう。これでは「柱ことじに膠にかわす（＝規則などにとらわれて融通のきかないこと）」と云うものである。さて文武の教習さえよく行届けば、大きな目的は達成されるのであるから、その国の禄高に応じて手軽に建立すればよい。文武が成るか成らないかは、その国主の世話が届くか、届かないかによって決まるのだ。このことを十分に理解せよ。今も大名の国々に練兵堂（尾州）、清雲寮（備前）、時習館（肥後）、明倫館（長門）、稽古館（筑前）等の学校があつて、それらは文の学問のみに限らず、武芸を講じて、文武を臣下に教えている。ただしその講習の内容は、浅薄にして十分なものではないが、全くその形すら無い国から見れば、勝っていることが甚だ多い。

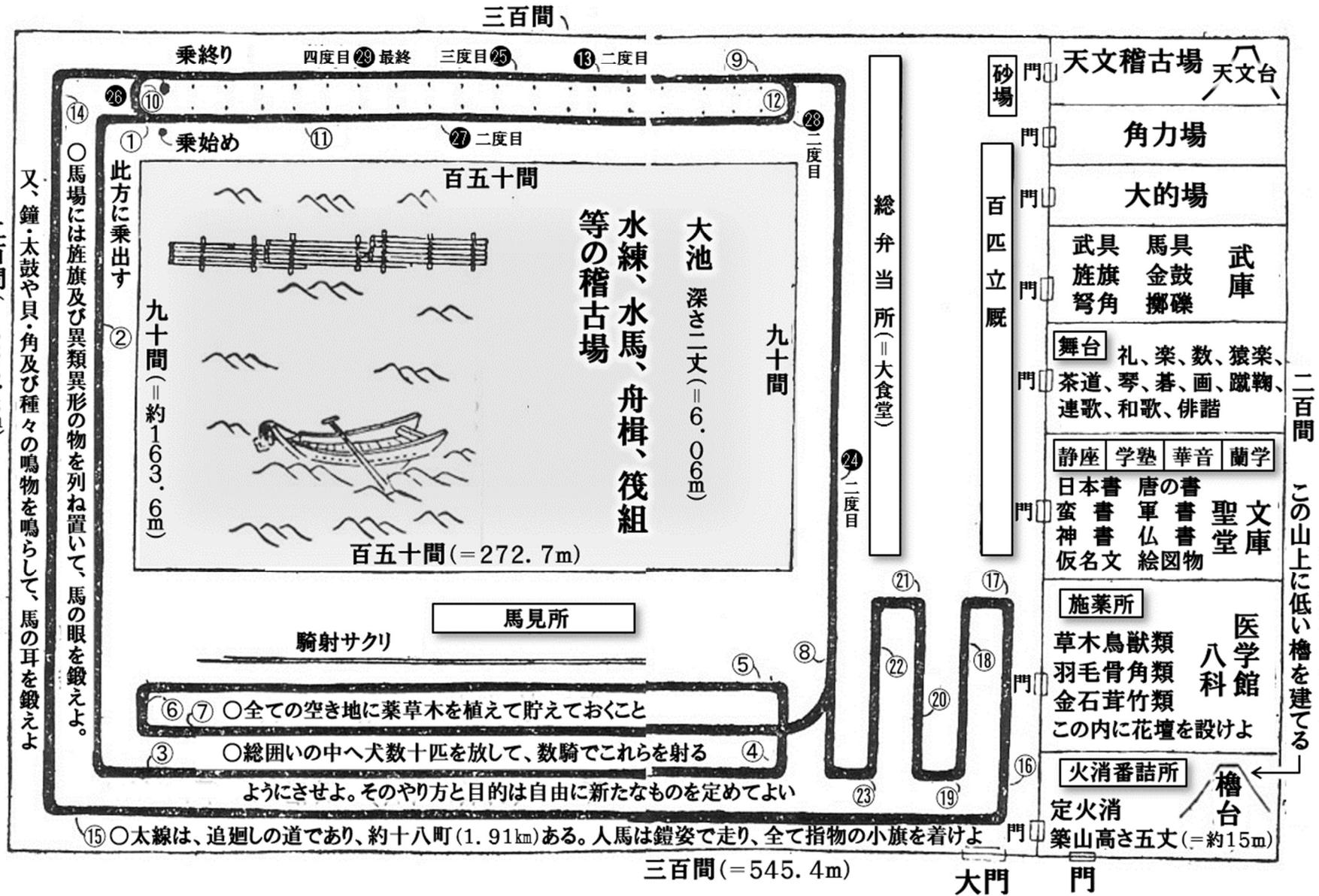
もしもそれなりの人物がいて学校を建立すべきだと思ふのであれば、以下に図示するように普請せよ。それでもこれ又この一例だけにとらわれてはならない。国の禄高の大小によって為すようにせよ。

○左に図示する文武学校は、巻初から繰り返し言及してきたように五〜六十万石の国の場合を一例として図示するものである。そうは云えども、これは定式の無い物なので、損益や広狭については自由に決めればよい。ただその趣意さえ失わなければ、一〜二万石の国と云えども必ず建立できる。ましてやそれ以上の石高の国であれば、できないはずがない。ただし、返す返すもこの一枚の図にとらわれないようにせよ。

附学校の事については、右に述べたとおりである。この意を推し広めて一家の内にあつては子弟を教える事も又、この趣意を以てせよ。そのようであれば上は大將から下は士卒や庶民に至るまで、皆が文武兼備の趣をよく理解して、その国柄、その人柄も当世の十倍にもなつて日出度いことこの上もないほどになるだろう。

これは大將一人の胸中にあることだと知れ。文武兼備大学校の図を左に示す。

文武兼備大学校の図



○右のように文武兼備の学校を建立し、教化がよく行届いて、君臣が相互に和するよ
うになれば、下位の者はよくその君主や上位者に思いを寄せるものである。全て人の

主たる者は、俗人が一向上人（鎌倉時代の僧侶、一向俊聖）を思うように、下位の諸臣にこの君主のためならば、と堅く思いをいたすようにさせなければ、軍を思うように動かして戦うのは難しいということを知っておけ。いずれにせよ、子弟が悪いのは父兄の愚昧に極まり、臣下（家来）が悪いのは主君の暗愚に帰するという事である。人の主たる者は、眼目を開いてどうすべきかを考えねばならない。このことを絶対にいい加減にしてはならない。

○人の主たる者に智が無く、術が無く、徳が無ければ、父の代には忠臣や義士であった者も新たな主を疎んじ、怨んで、あるいは隠居し、あるいは敵に通じ、あるいはその主を討とうという気持ちまで起こして、その御家に仕える武士たちは瓦が碎けるようになることは、和漢古今でもその事例が多い。中でも近世においては武田信玄父子の様子は多くの人の知るところである。信玄が生きていた時には、三十余人の大禄士たちが心を一つにして信玄に思いをいたし、忠義を全うしていたので、北に上杉、南に北条の兩大敵があったけれども、甲州、上州、信州の三国に敵を一人たりとも入れることなく一生を終えたのであるが、信玄が死去してから勝頼の代に至ってわずか二年の間に、信玄時代には鬼神をも欺きその忠義は金鉄のようであった勇士等も、たちまち心気が弛み、勝頼を恨み怒って、急いで討死をし、あるいは身を遁れ、あるいは敵に通じ、あるいは主を討とうという心が起こるなどしたことから、武田家はたちまち滅亡したのであった。これは他でもない、その主に徳と術さえあれば、その臣は忠義勇敢なのである。その主に徳と術が無ければ、その臣にも忠義が無く懦弱だじゃくなのである。人の主たる者は、心ひそかに考慮しなければならぬ。

○大名で身分が高くかつ奢おごれる身の上だけを知って、微賤おとしで身分が低くかつ貧困で

ある身の上を知らない者は、政治について知っている大名とは云い難い。又、国事は一人だけでやり繰りできるものではないので、家老や諸役人を立て置いて事を司らせるのだから、自らが国事に労するにも及ばない、などと云うのは遁れ言葉である。これもまた、国政に心掛けている大名ではない。この類の大名は、太平の世には、公おおやけの威徳によって幸いに禄位を保有しているが、事変があればたちまち国を失うであろう。慎むべきことである。

○徳のある国主、術のある大名は、領国から死に当たる罪を犯した人が出来て、やむを得ずこれを斬る時には、その斬る日は服装を整え、正座して、己が不徳なるがゆえに、領国から犯罪人が出てしまったことを恥じ、悔やんで、狩猟及び酒宴等の娯楽まで禁じて謹慎するものである。そうであるから、このような大名の領国には犯罪人が少ない。又、このようなことを慎むことがない大名の国中には、犯罪人が日々月々に多くなって人を殺害し、人を放逐することが頻発する。これを天に背くと云うのである。禍が必ず身に及ぶことになろう。慎むべきことである。

○大昔から五月五日には、家々にある全ての幟のぼり、小旗、鎧よろい、冑かぶと、太刀、薙刀なぎなた等を前庭に立て列ねて、相互に見物させたのは、すなわち武具改めの政（＝武具点検の行事）である。しかしながら平和な時代が長く続いたことから、いつの間にか男児の祝儀の玩具となつて、現在ではただ男児の有る家だけが飾り物をする事になってしまった。

そうであるから幟には金太郎、猪、熊、狸しょうじょうまゐ々舞（＝古典書物に記された架空の動物の舞い、能の演目の一つ）を描き、鎧・冑は紙でこしらえ、太刀、長刀は竹や木で製作し、

甚だしきは遊女や天狗等の造り物を並べ立て、ただ単に兎戯の物に過ぎないと世間一般にはみなされている。本来の意義は全く失われているのである。願わくは、今か

らでも全国津々浦々に号令して、古代のように男児の有無に拘わらず、家毎に本物の
武具、馬具を飾らせて、互いに励ませたいものである。もしも紙の鎧、木の太刀等を
飾っている者があれば、辱はずかしめよ。このようにすれば、五、七十年の間で、天下には
武器が満ち溢れることになろう。これ一つでも大いに武備を助けることになろう。

付記 百姓や町人には五月の飾りを禁じなければならない。しかしながら百年
来飾ってきたことであるから、これこそ金太郎、猪、熊等の幟だけでも許すべき
であろうか。

○私が幼少の時、ある先生から大名の目利めきぎ(＝鑑定、見分けること)と云うことを聞いた。
甚だ面白い説話である。紹介するので、参考とされたい。これは私が考えついたので
はなく、あくまで老先生の口授である。その数箇条は左記のとおりである。

ちまた巷では上を誇りそし、徳や術に勤めることなく妄りに福を神仏に祈り、不信や不義を
国中で行い、毎年の飢饉で餓死する者があり、国中の道や橋は破損し、家老や重
要な役人は頻繁に交替し、狩獵(鷹狩り)をめつたに行なわず、直言する者を遠ざ
けて諫言を容れず、媚びる者とは知らずに終には諂諛てんゆ(＝こびへつらう)の言説を
受容れ、自らは国政を聞かず、百姓や町人に度々用金を申し付け、金を受取って
賤しい者を立身させ、文武の芸を好まず、小祿の武士や微賤の者を軽くあしらっ
て侮り、文武に優れた人が用いられずして下位にあり、賞罰及び是非正邪の裁判
が速やかになされず、自分一人だけ智があると誇り、婦人の言うことを受容れて
用い、家中の邸宅に度々遊行し、甚だ短気であり、甚だ悠長であり、甚だ色を好
み、甚だ財貨を好み、国中で賄賂が行われる。

右の二十四箇条の内、五つは容認してやれ。五つまで許した上で、さらに五つあれば、

平和な世には国家が疲れて武道が弛む。乱世であれば戦に弱い。十あれば、平和な世には武士や民衆が怨み背いて服従しない。同列の大名からも誇そしられ笑いものにされる。乱世であれば家中がバラバラになって、一回の戦いくさでその国は敗れる。十以上ある者は、たとい平和な世であっても国家が危うい。乱世であれば戦を待たずしてその国は滅亡することになる。右の箇条に基づいて敵国の様子を探れば、その国に到着せず、その君主を見なくても、貧富や強弱についてことごとく知ることができるのである。孫子が「算」と言っていたのも、この類のことであると語っていた。私が思うに、これは実に簡潔にまとめた目利(≡鑑定法)であるとともに、自らの戒めとするにも十分な内容である。先生が言われた教えは何と貴重なことか。

○人の世の中には五難がある。飢饉、戦乱、水害、火事、疫病である。この五つは異変であって定期的に起きるものではない。それ故、何時到来するかを予測することが難しいので、それに備えておくことが、一国一郡を領する人の第一の心がけである。その心がけとして特別なものではない。金と穀物の二つである。この二つを貯える方法は、二、三千年前から繰り返して説かれている。とりわけ近年、荻生徂徠、太宰春台等の諸先生もしきりに力説しているが、行届かない。その行届かない理由は、世の中が華やかで侈おごり高ぶるにつれて、君主の執政への心構えが懦弱になったからである。懦弱になったが故に、身を苦しめて儉約をなすことができないのである。身を苦しめて儉約をなし、国家の不経済を取り直すことも出来ないほどに情けない心では、軍いくさなど到底出来るものではない。さっさと国を明け渡して浪人となるべきである。

○今の世において不経済を立て直し、五難に備えて金や穀物を貯えねばならな
いと思つたとしても、大昔から云われているように、道理一通りのことでは中々その

方策が行き届くものではない。そうであるから身を苦しめて儉約に勤めなければ、金や穀物を貯えるほどの成果は得られないものである。さて「身を苦しめる」とは、美食を減らし、衣服を粗末なものにし、家の造りを簡素にし、出費がかさむような遊樂をやめ、妾や奥向きの婦人（≡家政婦）を大幅に削減し、贈答の品物を薄くして、唯一省かないのは公務だけである。右に述べたように自ら意識して実践することで、いかなる不経済も立て直し、金や穀物をも貯えて、そこで始めて武を張る（≡強く勇ましくなる）ようにせよ。これらは主君は云うに及ばず、給料の少ない士と云えども、この心掛けであらねばならない。これを武政の根本とする。

○世人にはお定まりの返答がある。心ある者が武備あるいは軍陣等の心掛けを談じたならば、これに対して言うには、「私は幸いにも平和な世に産まれたものだ。存命の間だけでも戦乱が無ければ、この上ない幸いなのだ。子孫のことはその時のことよ」と。このように云うのが十人中の九人である。これは悟りきった言葉のようであるが、その実は武備が無いのを恥じての言い訳に過ぎない。このように言う人こそ、凡夫の中の大凡夫と云うものである。恥ずかしいと思え。さて、及ばずながら天下のことや後世のことを憂えてこそ、真の武備と云うべきである。学者も又そのとおりであり、詩文や風雅のみに走って、世の中を苦しめない学者は、真の学者とは云い難い。ただの物知りに過ぎないと云うべきである。

○今の世では上下ともに穀物を賤し^{いや}み、金を賣^いんでいる。その心根は、飢饉の年になつて米穀がどれ程高値になつても、金銀さえ多くあれば買^たい求^{やす}めることは容易い。こうしたことから金銀を第一として穀物のことは心中に無いのである。これは甚だ危うい心掛けである。その理由は、三々四々国の飢饉であれば、豊年の国から飢饉の国

へ廻して送るだけの米穀もあるに違いないが、もし二〜三十ヶ国も一斉に飢饉になれば、廻して送るだけの米穀などありはしない。その時になって金銀を煎じて飲んだとて、命が助かるわけがないのだ。およそ兵乱の世にあっては、農民も平穩に農作をするのが難しいのであるから、飢饉の年でなくても米穀は不足するものである。これらのことをよく理解して、金銀は命を救う第二番目の物であることを知り、米穀を第一、金銀を第二と心得て、平素から食糧にできるものを貯えることに勤めよ。これが国や郡を領する人にとって、第一の覚悟であるとともに、下は庶民に至るまで、この心掛けを忘れてはならない。こうした食糧の備蓄は、大にしては武備として国が用いるものであり、小にしては各人の命を活かすものである。これらは国主や領主自らがよくよく面倒を見なければならぬ。

食糧を貯える方法は、日本や支那で昔も今も様々なことが説かれているが、一概に拘泥してはならない。ただ国土が肥沃か瘠^やせているか、その年が豊作か凶作か等を考えて、時に臨んで分量を定めて貯えるようにせよ。大概凶年は三十年に一度、大飢饉は六十年に一度程度で起きるものである。その心掛けで貯えよ。

○大将たる人は、道、天、地、将、法の意味を詳しく会得しておかねばならない。これらを知らなければ、一度は勝つことがあっても、大業を仕損じることがある。先人たちの偉業や失敗を考察しながら学び取れ。

○大将たる人は、たとい伶俐^{れいり}であつても、自分一人の才能・能力を恃みとしてこれを誇示してはならない。文武に長けた智謀の人を選び、重役に任じて配置し、国事や軍事について共に相談して計画せよ。これも又、日本や支那の名將の仕方から学び知るようにせよ。孔子も「備は一人で求めるなかれ」と述べていた。

○今の世でも武術が行われている様であるが、文に基づかないので、武のみに偏ってしまう者が多い。弓術が特に流行しているが、ただ奉射の礼式のみを専らとして、武者が軍いくばくに用いる射術には疎い。このやり方は逆法である。武士の射術は先ず軍用法を習って、後に礼射を習うのを順法とする。十五巻目に述べている馬術も又、同じである。この心持を十分理解して武術を教えることが、大将の器と云うべきである。

○兵を出勤させるにあたり、先ず敵將の賢愚、政務の善悪、武備の強弱、国郡の大小、土地の寒暖、人数の多少等を予め推し量り、こちらも相当の作戦を立て、相応の人数を遣わすようにせよ。これを兵の算というのである。算無くして兵を出すときは、不覚を取るものである。そこで算は兵を用いる上で肝要であると云われる。こうしたことから、孫子にも「算多きは勝ち、算少なきは勝たず、況や算無きに於いておや」と記されている。始めに述べた大名の目利めききというのも、つまり算のことである。

○大将たる人は、俗事はやりごとや流行事の類にもよく関心を持ち、又は陰陽家の説、五行の生剋、又は仏語、神託の類も軍事の外に学んでおかねばならない。たとい実用性が無いと云われても、人を使うのに便利である。古来、その事例も多々ある。

○兵を率いる者であれば皆、始めにも述べたように、日本や支那の軍談や軍記物を多く読み、名将が採った編成や、立てた作戦をよく研究して、その利害得失を斟酌せよ。地形、城池等、又は武具、馬具の類、あるいは鎧おどしげの緘毛、旗、指物の製法、あるいは戦場の立振舞い、言葉遣い等詳しく知るに越したことはないが、常人がこれらに拘泥すると本質を見失う。ただ広く大本を知ることが重要なのである。

○大将が士民（＝兵士と民衆）を扱うことについて、十分深く考えねばならない。温和にして柔に過ぎるようであれば、士民は柔弱になって、その精力も斉一にならない。

又、辛酷にして猛に過ぎるようであれば、士民は離れて親しまず、或いは怨みを生ずるものである。韓子にも「猛毅の君は外難を免れず、懦弱の君は内難を免れず」とある。だじやく。全てにおいて柔弱にして快いことばかりであれば、下の者は徒に親しむだけで、物の役に立たなくなる。例えば蜀の先主・劉備玄德のように。又、心が離れて親しまないようであれば、人は怨み背いて長久を保つことができない。例えば楚の項羽、又は織田信長等のように。この二つをよく会得して、寛仁をもって親しみを厚くし、威厳をもって人を畏服させることが、良将の能力であると知れ。子産しきん（春秋時代の鄭に仕えた政治家で、公孫僑とも呼ばれる）が「寛猛相濟う（政治には寛容と厳格との調和が必要である。「春秋左伝」昭公二十年から）」と云うのも、このことである。

○物に本と末があり、事に始まりと終りがある。兵に將たる者の本末を云えば、人を扱う事が本であり、城や池、着具の事などは末である。又、血戦の一事について云うならば、強いことが本であり、間合いを詰めたり開いたりする形態等は末である。全てのことは本をしっかり会得して、末は概略を知ればよい。孟子の「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」と云うのも、人の和は軍法の本であって、天の時や城郭等は末であると云うことである。これこそが軍家第一の秘訣であると知れ。

○不徳にして不埒ふらちであり、何も取り締まらない大将の家中は、家老及び末々の諸役人も同じく不埒ふらちで何も取り締まらないので、国家の経済が悪化しても心に苦しまず、金や穀物を備蓄する政策をも知らず、武備の衰微、武士や民衆の困窮及び悪風、又は盜賊が蜂起しても、道や橋が損壊する等までも心に憂きことと思わずに、ただ家老は身分が高いことを一家中に誇り、又面々の頭々はそれぞれを支配する権力を誇るだけであって、上の為ということを知らず、下の為などはなお知らず、君臣共にただ飲食

や狩猟等の事に年月を送るのである。最も悲しむべきことではないか。これらの家士を物に喩えれば、糞中の蛆のようなものである。こうした糞蛆は糞中に生まれ、糞中で成長し、糞中を一生の住居とするので、糞の穢らわしさも、臭さをも、穢らわしいとか臭いとか思わずに一生を送るのである。これを清い所に住む虫から見れば、その穢く臭いきたなことは、言語道断である。彼の不徳不埒な家の諸役人も、他の良識ある大将の家士から見れば、清浄な場所に住む虫が糞蛆を見るようなものである。その清穢や賢愚は天地ほど懸け離れている。不埒な家の君臣は、これを察しなければならぬ。

○將軍の五事とは、道、天、地、將、法である。詳しい事は『孫子』に述べてある。

○將軍の五徳とは、智、信、仁、勇、嚴である。

○用兵の五法と云って、兵を出すべき五つの場合がある。一つには敵国の政治が仁愛を欠いて、下民が苦しんでいるのを討つ。一人を殺して万人を救うのである。二つには敵国の君臣が不義無道であるのを討つ。三つには君主や父親の仇かたきを討つ。四つには敵国の君主が無礼にして徳を破り、他国を侵略するのを討つ。五つには君主の徳が廃れて、上下が混乱するのを討つ。これらを五法と云うのである。

○將軍に十の過ちがある。一には自分が剛強なので、妄りに敵を侮る。二には臆病であり、よく敵を恐れる。三には自分が伶俐で頭が良いので、人を軽んじ侮る。四には愚鈍であり、いつでも事を人に任せる。五には貪欲で下の者から奪い取る。六には極端に潔癖であり、人が懐かない。七には仁愛を欠き、下の者に恵み与えることがない。八には短慮にして、かつ分別が浅はかである。九には緩み怠ゆるって、有利でも進まない。十には頑固で愚かなため、理不尽な行動が多い。これらの事を十分に慎むこと。

○將軍に上中下がある。上將は智謀によって勝ちを制して、勝ちを刃に恃んだりはし

ない。中將は兵法によって勝ちを制して、奇正分合がよく状況に合致する。下將は刃によって勝ちを得ようとし、兵法と智謀とを知らない。中世の足利尊氏卿と楠木正成と新田義貞とを見てみよ。尊氏卿は終始智謀によって戦い、正成は終始兵法によって戦い、義貞は終始刃によって戦った。これこそが、この三將の上中下である。

ある人が云うには「何をして尊氏卿の智謀であると言うのか」と。これに答えて云うならば、北条高時が繁盛している時には、鎌倉に参勤して高時の縁者となつて、他家であつても一門と同様に奔走された。これが一つの智である。高時が度々兵を出して合戦があつたけれども、尊氏卿は一度も軍に赴かれたことがない。これが二つ目の智である。七枚起請を書いて高時を安心させ、速やかに鎌倉を出発した。これが三つ目の智である。後醍醐天皇の側に付いてから後は、よく天皇をなだめ賺^{すか}して官位も禄も共に新田義貞、楠木正成、赤松円心、名和長年の四人の功臣の上に立つ。これが四つ目の智である。既に天下の武將になろうという望みがあつたが、その妨げとなるに違いないのは大塔宮、義貞、正成、円心の四人であることを了知して、先ず大塔宮を嘘の訴えをして牢獄に下し奉り、義貞には女色により武備を怠らしめる為、准后に近づいて勾當内侍^{こうとうないし}を義貞に賜るようになさせ、円心には天皇を恨み奉つて反逆の心を生じさせる為、播磨国の守護職を召し放させるように奏上して仕向け、正成は正直な忠臣にして、かつ小さな器であるということを知つたので、敢えて嘘の訴えで貶めることもせず、ただ厚く遇して無礼な対応もしなかつた。これらの事が五つ目の智である。鎌倉において北条時行に打勝つて(建武二年 中先代の乱)その機を外さず、直ぐに征夷大將軍と名乗つた事は、六つ目の智である。箱根において義貞に打勝つて、間を置かずそ

のまま京都へ攻め上った事は、七つ目の智である。京都の官軍に大いに敗北した時は、畿内や近国に片時も足を留めず、飛ぶように九州まで逃れ下った事は、八つ目の智である。逃れながら院宣を申し受けて、天下を天皇と天皇の御争いに為して、自分は朝敵の名を免れたのは、九つ目の智である。九州へ逃げ下って、落人の身でありながら少弐、大友等の大諸侯をたちまち帰服させた。これが十番目の智である。湊川に正成を討っても、その首を獄門にかけず、却って本国に贈って葬送をさせた上、楠木家の分国である摂津、河内、和泉の三州には絶対に侵入しないと伝えることで楠木家の心気を緩ませて、敵を少なくするという術を施した。これが十一番目の智である。再び京都へ攻め上って、後醍醐天皇及び義貞等を叡山に追い籠めて後、さほど大規模な攻撃もせず百余日を過ごし、天皇及び諸官軍の気の弛みを察して、天皇に和睦を乞い奉り、下山なされ参らせて、刃を血でぬらすことなく叡山を陥落させた。これが十二番目の智である。新田義顕（義貞の長男）の首を得て、事々しく晒し首にした。これが十三番目の智である。天皇が京を逃れて南朝を建立なされたが、それが未だ完成していないことを知っても、襲わなかった。これが十四番目の智である。これらの事は尊氏卿の智と云うべきである。この他にも日本や支那での古今の大將たる人の所業を考察して、よくその上中下を会得し、後の將たる人も、上の境地に至るべきことを希^{こいねが}うようにせよ。

○多は少に勝ち、強は弱に勝つのは、自然の理^{ことわり}である。そうであるから、一国一郡でも主たる者は人を多くし、人を強くする術^{すべ}を知っておくことが、兵家にとって最も肝要である。そこで孔子も子貢^{しこう}（前五二〇）四四六年、孔子の弟子にして孔門十哲の一人に

対して「食足りて兵足る」と教え、冉有ぜんゆう(孔子門十哲の一人)に庶、富、教を語られたのであった。これらのことをよく考えてみよ。さて人を多くするにも、強くするにも、武士を土着させなければならぬ。武士が土着すれば、奢り高ぶることがなくなる。奢り高ぶらないので、贅沢して貧しくなることもない。貧しくないのも、禄に依じて普代の家の子、並びに武具、馬具等を心掛け次第で所持できる。その上に武士が土着すれば、山林では鳥獸を狩り、水辺では漁労し、又平素から馬に乗って走りまわるので、自然と馬術も上達し、又遠方の人と互いに往来するので、山川の悪路にも慣れ、筋肉や骨格といった体つきが勇壯になるのである。これぞ真の武士と云うべきであろう。普代の家の子を多く所持できるので、軍役も多いものだと知れ。

○大昔は兵を農民から取っていたので、兵の数が今の世に比べて二十倍であった。中世以来、武士と農民とが分れて、兵を農民から取らなくなったので、兵の数は大いに減少した。それでも武士は皆が土着であったので、今の世に比べれば十倍であった。天正年間以来、武士は土着せずに城下詰になったので、兵の数も又大いに減少して、中世から見れば十分の一になったのだと理解せよ。備前の「二万の里」の由来等を考え合わせて、農兵が多かったことを知れ。願わくは武士を土着にして、譜代の家中を多く扶持ふちさせるようにし、又地頭や領主の思いどおりに百姓を兵に仕立てる制度があるのが望ましい。又坊主、山伏等をも組織化して、軍兵に用いるべきであり、こうした事も将帥の胸の内にあらねばならない。このように心掛ければ、兵の数は古代の多さに戻るであろう。それでも二百余年を経たなされたことであれば、急速に改めるのは難しい。最初にも述べたように、三十年を期間として改革すべきである。

三十年を期間とすることは、これまでに三度言及している。しかしながら日本人

のせつかちな気質には、迂遠に思えて動こうとしない。却って唐風だ、とか机上の空論だなどと罵って、理解しない人が多いけれども、これは軽薄な風俗に任せて、現実を重視した地道な修養を怠っているからである。支那やオランダ、ロシア等で大事を成したのを聞くに、三十年などはおろか、五十年、百年、三百年を期間として計画・立案することがある。そうであるから、五代も十代も経て、祖先の志を成就することもある。これらは皆、国政の宜しきと人心の堅実さによるものである。羨ましいことだと思わねばならない。

○上述したように、武士に大禄を与える事は、その禄に応じて陪卒を出すようにさせて、軍役に充てる事である。しかしながら、現在のように武士が土着しない時代には、華やかで贅沢なことが盛んになって士太夫は悉く貧窮するので、軍役の人数を譜代にして召し使うことができず、ただ一季か二季限りの渡り者を召し使うことになる。なる程、平穏な日々にあつては軍役に必要な頭数はある様に見えるが、戦に出動するに当たって、命が危うくなるような場所へ召し連れたならば、主の先途に進み出て命懸けで戦う者は、十人に一人か二人であろう。そのような時には、二〜三石の足軽も自分一人、二〜三百石の士も自分一人のことしか思わないようになるに違いない。これは（忠誠心に満ちた）譜代ではないからである。譜代の利点については、十四卷 目の人数積の箇所詳しい。このよ
うな時代には、武士に大禄を与えるのはほとんど無益であると云えようか。又今の世では、五百石で馬一匹、一万石で十六騎と覚えている人も多い。甚だ事実と異なるようである。武士が土着すれば、五百石の禄であっても馬の二〜三匹、若党の七〜八人、十人、乃至二〜三十人も出すことができ、一万石であれば、騎馬の五〜六十、軍卒の七〜八百、あるいは千人も出せるものである。これらの事は、土着の様子を知らない

今の世の武士には理解し難いことと思われるであろう。今でも土着を維持している大名の家士に問うて、私が言ったことが妄言ではないことを知れ。

○大将たる人は日本と支那の軍談や記録の書を多く読まねばならない。自然のうちに名将と愚将の巧拙の違いが解るようになる。これらを十分に理解して利害得失を考察すれば、苦勞して一流二流の軍学を伝授されるよりも有益であるものと思え。

○大将たる人は文武両全であることを目指さなければならぬ。日本と支那に大将たる人は多いが、文武二つながら備えている人は少ない。異国においては武王、呂尚、齊の管仲、漢の二祖、蜀の諸葛孔明等であろうか。日本においては、神武天皇と神祖徳川家康の二君である。後世ではロシアのピョートル一世（日本で正徳年間（一七一―一七一六）頃の国主である。）

であろうか。この王は五世界に君臨する唯一の皇帝になろうとして、徳を布き、武力を展開して、数代を経た今でもその命令は弛むことがない。文武両全の統率者と云うべき人物である。全ての大将たる人は、たとい及ばないまでも右に挙げた事を、心掛けよ。これは、心術にある。又、こうした文武両全の統率者よりは一等下がる例であるが、源義経が奇襲や急襲に長じ、武田信玄・上杉謙信が士卒をよく訓練し、太閤豊臣秀吉の猛威、加藤清正の突撃戦のようなものは皆、それぞれ個別の妙処（＝非常に優れた業）である。その妙処を選んで自分にも兼備したいものだと思え。これも又、大将の志気と云うべきである。

○大将たる人に威（＝威厳・偉大さ）が無ければ、民衆を畏服させることができない。威というものは、法を厳格にすることと、尊大で驕り高ぶる者を誅することによる。

又、明（＝ものごとを明らかにする力）が無ければ、衆人の励みも薄く、怨みを生じることさえある。たとひ小さな功績でも、しっかり賞することこそが明である。この二つ

のもの（すなわち威と明）は、大将たる人に最も必要とされる徳である。

○昔の名将は皆、一騎当千の士を懇ろに召使い、自身の警固役として旗本に備えていた。漢の高祖の樊噲、周勃、蜀の玄德の関羽、張飛、趙雲、頼光の四天王、義経の八勇士、義貞の十六騎、正成の二十八人党のようなものは皆、陣中を堅固にする為である。将たる者は心得ておかねばならない。軍家で「中ご」「身堅め」等と云うのも、この事である。

○馬の乗り方や飼育法は、ほとんど古法を失っている。詳しいことは十五巻目に述べているとおりでである。これ又、軍務の特に中心となる考えであって、最も忘れてはならないことである。

○全て軍は大勢の人を一致して用いる事である。大勢を一致させるのは、法を立てて行動を統制すること無しには為し難い事である。そうであるから、善く兵を用いる者は法を厳格にしてきた。武王の四伐、五伐の法を始めとして、孫子が美人を斬り、司馬穰苴が莊賈を斬り、曹操が自分の髻を切ったような類は皆、名将が法を貴んだ事例である。法をゆるがせにするのは、愚将と云うべきである。日本に名将と称する人は多いと云えども、皆が天から授かった才能だけで学問が無い人々であるから、皆が通達の意義や理に疎く、ただ勢いを専らにして法を立てることを知らないのです、その軍立てが斉一ではなく、堂々整齐とした威儀に欠けていた。威儀を欠いていただけではなく、不意に突破されてしまった例も多い。これらは法を重んじなかったことによるものと理解せよ。

○軍は不意にして神速であるのを貴ぶ。韓信は木罌（木製の甕）にて河を渡って魏豹を破り、源義経は鴨越を落として須磨の平家を破り、渡邊を渡って屋島の平家を破

り、新田義貞は一夜の中に評議を決定して、鎌倉を踏破った類は皆、戦機を看破して危ぶまなかった。これらが兵法家の妙機であると知れ。

○大将たる人は戦法、戦略、兵器、守攻の道具に至るまで、時宜に適った工夫を思いめぐらして、どのようにも臨機応変して取り廻さねばならない。楠木正成が油を浴びせかけて鎌倉勢の梯かけはしを焼き落とすし、又泣き男を出して足利軍の警戒心を緩めて不意を討ち、織田信長が長柄の槍を製作して強敵を挫き、島津家が関ヶ原を退去した時、戦士に種子島を腰差にさせて（刀と鉄砲の両方を使わせて）退却を有利にしたような類は皆、将たる人の臨機の権謀である。兵を率いる人は、心得ておくべきことである。

○善く兵を用いる者は、敵を発見する時には士卒が闘うべきことを願い、既に刃を交えるに至っては、士卒が進んで死すべきことを願い、引き鐘を聞く時には士卒が怒る。これらの事は皆、大将の才術によるのである。こうしたことから伝えられるに、「説いて民を先んじ、民その労を忘れる。説いて難を犯し、民その死を忘れる」と云われる。そのように説得できる道理は、大将の心のうちにあるのだと知れ。

○兵器は多いと云えども、昔は有って今では絶えたものがある。今盛んに使われているが実用性が無いものもある。よくこうした二つの分類を比較検討し、絶えたものを再興し、無用なものを捨ててしまうことは、これも又大将の器量によるのである。

○支那では大昔に振旅しんりよ、治兵、操練などと云って、兵馬を集めて軍の稽古いくさをしていたものである。もつとも今の世にあってもその法は途絶えることなく、諸国に毎月、軍の稽古があるということを、明和の頃（一七六四〜一七七二）に支那に漂流して無事に帰還した者たちが直に見てきたのである。日本でも大昔、都には鼓吹司くすいしを置き、国々には軍団を置いて、軍の稽古をすることを強制し、その上に犬追物、牛追物等があつ

て、人馬の足並みをそろえ、練度を均一にすることが度々行なわれていたが、近世には絶え果ててしまった。現在の相馬家の妙見祭、我が仙台藩の巻狩り等は古いにしえの遺風であつて、一見すると治兵、操練に似ている行事であるが、残念ながらその法は粗略である。そうは云えども又、武を講じる一端には違いない。これに加えて一つ二つの精しい法を以てすれば、真の治兵、操練とも云えよう。大将たる人は奮発して、これらの事を諸国で始めてもらいたいものだ。

○今の世では弓、鉄砲、長槍等の組を区分して置き、弓組は鉄砲を知らず、鉄砲組は弓を知らない。このようになるのは、一方利きであつて不自由な教え方である。弓、鉄砲、長槍等はその組々に区分して置くにせよ、稽古は弓、鉄砲、長槍等を交えて教え、両用使いに育成して配置したいものである。これも又、大将の器量次第である。

○諸軍家に陣中に召されて同行する役者（＝役職に就く者）と云うのがある。その職種は家々により違いがあると云えども、大概是医者、儒学者、出家（僧）、猿樂、金堀、算勘（＝會計士）、弓工、銃工、鍛冶、染師、塗師、咄家（＝落語家）等である。この内、

猿樂と咄家はほとんど無用の者なので、省いても害は無い。出家（僧）も無用の者に近いが、討死した者を取扱う役にすることで、死を重んじ、人道に背かせない為の道具にもさせ、又は敵方への使いの役に使うこともあるので、召し連れるべきである。

これら以外の工人は皆、有用の者であるから省いてはならない。それでも現在のよう
に、弓師は弓師、鍛冶は鍛冶として、兵とは別に職人と称して召し抱えておくのは、
兵術上の観点を欠いていることの一端である。大将の心掛け次第で弓工、銃工、鍛冶、
染師等は足軽が兼務するように仕付けておくことができるものだ。もつとも武士で
あつてもこれらの細工を経験させ、技術的なことを覚えてるように教育しなければ

ばならない。元禄（一六八八〜一七〇四）の頃までは、草鞋わらじや馬沓ばくつを自分で作る事ができない士などは、同僚に嘲笑されていたと聞いたことがある。さて儒者については、少し学んだだけの理屈者では、ほとんど物の役に立たない。理屈を離れて業わざに達し、博覧にして多くの事例を知っている者を採用せよ。

○今の世では硝石、硫黄等は皆、商売人の手から買い求めることになって、金銀さえあればこれに不自由することがないと思う人が多い。しかし、戦乱が起こる時には、商売人も通行できないものである。その時に至っては、自国で産出される物がなければ、やがて行き詰まることになる。これも又、大將が処置すべきことであり、硝石、硫黄、鉛、篋竹のたけの類は、各自の領国から入手できるように手配しておくべきである。

○今の大名には諫役いさめやくの大臣がいないので、君主はその身の非を知らないでいる。たまにたま思い切って諫める者があれば、たちまち不遇になって、職を剥ぎ、禄を削って、恥を与えるので、自然と忠臣の道を塞いで、ただ今日君主に受容れてもらえる事だけを言って日を送るのである。こうしたことから、君は君ならず、臣は臣たらずの国が多い。願わくば一万石以上の大名は諫役の家臣を定めておいて、どれほど君主の氣に障ることを申し上げても決して罪としないという規定を立て、諫めさせよ。自然に自身の非を知ることになろう。非さえ知れば、国家の幸いとなるものであると思え。又一つには、別に諫役を立てるにも及ばない。家老職の者であれば、少しも遠慮せず諫めよ。もしも諂へつらって諫めない者があれば罰すると申し渡しておけ。そして家老は皆、一同に会して言い合わせ、よく心を合わせて諫めよ。諫めない者があれば、同役により申し上げて職を剥奪せよ。これを国家の定法とすれば、上下各々おのおのが非を知つて、家は齊ととのい、国は治まるに違いない。誠にこのようであれば、一身のためだけでは

なく、公儀への忠義、領国への憐愍れんみん（＝あわれむこと。なさけをかけること）、文武の基本もこれに勝るものはないだろう。大将たる人はよくよく考慮して、諫言を求めよ。これを怠ってはならない。

○国郡を領する者は、それぞれの領国の気温の寒暖をよく承知して、それに応じた処置をせよ。しかしながら北緯三五度より南の地は暖かいがゆえに、春夏の暖暑も早くやってきて、かつ強く、秋冬の冷寒は遅くやってきて薄いので、麦が雪で朽ちることなく、稲も青立ち（＝稲の穂が実らないまま立ち枯れになっていること）に患わされることがない。その他にも草木が繁茂しやすい。それゆえ産物も多くなり、金銭や穀物の収穫も多いので、国家の統治もやり易い。又、北緯三六〇七度より北の地は寒いがゆえに、春夏の暖暑も遅くやってきて、かつ薄く、秋冬の冷寒は早くやってきて強いので、麦が雪で朽ちることが多く、稲にも青立ちが多い。その他にも草木が繁茂し難いので、産物も少なくなり、金銭や穀物の収穫も少ない。従って、国主も貧乏になりがちで、諸士も貧乏である。上下の者がいずれも貧乏なので、上下の武備も弛むのである。寒冷地を領する人は、よくよく配慮しなければならない。配慮すると云っても、特別な事ではない。寒気に負けない草木を育て、国の産物を多くし、それによって国の所要を充足し、通商をも多くして、財貨を盛んに流通させるようにするのである。さて、温暖の地は草木が生えて茂り易いので、手入れ次第でどんな作物でも育てることができる。北緯三六〇七度より北の地は、草木が生えたり茂ったりし難い。強いて植えても茎や枝だけが成長して実らない物がある。たとい実っても作物として収穫できる実にはならない物がある。全て温暖地に比べれば生茂や虚実は半ばするものである。これらを考慮しなければならぬ。先ず寒冷地でも生茂し易い植物は、木であれ

ば漆うるし汁じゅうで蠟ろうを作り、桑こう養蚕ようさんして絹きゆうを作る。楮こうぞ紙かみを作る。この三木は寒冷地にも生茂し易くて、大いに役に立つので、寒冷地の宝と云うべき物である。三木は山野、川端、或いは屋敷の境、畑の境等に植えよ。

これら以外にも胡桃くるみ、榧子ひし（カヤの実）、珍菓ちんかを家毎に植えておき、実の油を取って家庭での日用品とせよ。珍菓は奥州で産出する木である。『大和本草』に「シラ木」と出ていて、『本草綱目』には「婆羅得」と云う物がこれであると述べている。

草であれば麻である。寒冷地では木綿が生えないので、皆が他国の木綿を用いるが、それにより自国の財貨が他国に流れ出て、自国の経済を悪化させている。そこで寒冷地では、自国で産出する絹と麻布と紙布しふとを用いて、他国の木綿を禁じよ。そうすることが、寒冷地における一つの経済政策であると理解せよ。

○国が自給自足のために新たな農産物を始めるのであれば、それまでの水田稲作を一切妨げず、壮年男女の労力を費やさず、代わりに老人、廃人、少年少女等の農業を勤めていかなかった者の仕事にして、それらを集大成すれば、大きな国産品になるだろう。しかし、このことを理解できずに良田を畑に変え、壮年男女の労力を用いて新たな農産物を始める者がいる。財貨は流通して賑わう様であるが、やがて穀物が不足するようになって、実に好ましくないことである。こうしたことを十分に配慮しなければならぬ。さて又、右の産物以外にも、諸々の細工物を庶民や諸家中にまで教える数多く造るようにさせ、国の需要を充足し、財貨をも流通させるようにせよ。既に『六韜』でも大農、大工、大商を三宝と云っている。詳細にわたり工夫しなければならぬ。さて、このように国を富ませ、人を富ませることを説いているのも、必要な武力を充実させるためである。いかに国の君主が命令を下しても、又は人々の気持ちがやたらと武を好んでも、貧乏であれば武力を充実させることができないのである。

国家に武備が無いのは、国にしてその国にあらずと云うものである。そうであるか

ら、古代支那でも聖人の政治は農業と儉約とを教えて国を富まし、人を富ませて武力を充実させる事を第一に教えた。オランダの政治は、その国が寒冷地で穀物や産物が豊富ではないことから、万里の外国と通商して、諸国の財貨を自国に取り入れ、商業を主軸として大いにその国を富ませて、徹底して武力を増強し、小国にして大国に挟まれながらも千八百年来一度も他国からの侵略を受けたこともなく、その上遠く万里余りも隔たっている呱哇國^{ジャワ}を切り従えて自分たちの領地とし、又、アメリカ洲の中においても一国を切り取って、新阿蘭陀^{ニューネーデルラント}（一六一四〜一六七四年、北米東海岸に建設）と名付けて自分たちの領国としたのであった。何と見事なことか。何と勇ましいことか。よくよく考えてみよ。

○国の君主と家老とが無学で為す術もなければ、国家は貧窮する。貧窮すれば領国中の河川の治水工事が疎かになる。疎かになるので、年々夏と秋の小さな洪水にも堤が押し切られる。そのため、田畑は水浸しになって、永く荒れた土地が年々出来てゆく。これは貧窮の上に又、収穫の不足になる一つの要因である。又、橋々の補強工事も疎かになる。疎かになるので、これ又年々の小さな洪水でも橋が落ちる。これゆえに領国中の数多の橋々を一年に二〜三度ずつは工事することになる。工事のたび毎に大きな橋では人夫三〜四万、小さな橋でも人夫五〜六千ほどを使役し、しかも半数以上は賃金を支払って取り立てるので、百姓の労力が不足して、天候上は凶年でなくても、田畑は不毛である。これが収穫不足になる二つ目の要因である。この二つによって百姓は疲労して、農業を楽しく思わないので、いつの間にか農作業に励まないようになり、従って百姓も貧乏になる。そこで、あるいは逃げ出して他国に移る者もあり、あるいは農業を捨てて商人になる者もあるので、郡や村の人口が減少して、田畑はさ

らに荒廃する。これが収穫不足になる三つ目の要因である。収穫がいよいよ不足するようになって、諸侯の御家もさらに貧窮するので、毛見けみ（＝検見、米の収穫前に幕府又は領主が役人を派遣して稲のできを調べ、その年の年貢高を決める徴税法）と称して奸吏（＝腹黒い官吏）を村里に遣わし、年貢を責め立てる。責め立てられた百姓等は、その奸吏に賄賂を与えた上で、豊作であっても下作であるように見せて、諸百姓の年貢を少なくしてもらおう。これが収穫不足になる四つ目の要因である。この四つに起因する不納によって御家も又、さらに貧困になるので、家中諸士の俸禄から借りることになる。一年借りても足りないので、三年も五年も借りる。三年、五年と借りても、それを収益に結びつけることができず、働いて貧困を取り直すこともできないので、綿々として三十年も、五十年も借りて、それが常態となることから、家中諸士はことごとく貧乏になり、禄相応の武備を揃えることができただけではなく、譜代相伝の家人にも暇を与え、又は在来の武具、馬具等でさえも売って代金として、日常生活の助けとするので、諸士の武備も弛ゆるむ。武備が弛んで人心は懦弱である。人心が懦弱になれば、義理を捨て、法を守らないで、皆がそろって無頼不法の風儀となり、終には国家が傾くのである。これは全く国君一人が賢いか、賢くないかによるものであって、天の災いでも、人の過ちでもないものと思え。よくよく考えれば、大名の貧困とは気が弛んで武を忘れてしまったことに起因するものである。大名でありながら武を忘れてしまつては、幸いに太平の世に生まれて、高位や大禄を保有していても、「戸位素餐しゐそさん（＝屍大名の無駄食い）」と云うものである。何と恥ずかしいことか。何と悲しいことか。

○上述した所の気温の寒暖、又は国土の経済、文武を奨励する筋道までよく理解していても、自分一人が知っているだけでは、ほとんど物の役に立たない。その国の上下

万民の皆知ることができ、皆が勤めるのでなければ、善の善ではないのだ。これを
実現できる方法は、その国々の寒暖に応じて処置すべき事、産物や細工物等を新たに
興す方法、及び文と武とを廃れさせないための掟とを、詳しく分類整理してそれらを
修得する方法を記し、これをその国々の国学の書と定めて、仮名書きの公版（＝刊行
物・パンフレット）にしてその国に普及し、国君、家老、諸士、庶民までよくその国学
の書に精通して、よく実行するように教えることである。たといいかなる技術や能力
があっても、その国学の修行が無い人は罰しなければならない。これは人を恵み、人
を富まし、国を利し、武を振るうための術であり、国家を堅固なものにする上で欠く
べからざるものである。つまり、文があっても武がなく、武があっても文がなく、ま
た文武があってもこれを国家に及ぼし、人に施すことができなければ、その一を知っ
てその二を知らないとも云うべき不具の人であると心得よ。これらの事は私の妄言
ではなく、全て聖賢の遺した教えである。よくよく創意工夫しなければならぬ。

○大昔の兵を論ずる者に数家ありと云えども、七書に過ぎず。その中でも戦いの「機」
について優れているのが孫子と呉子の二書である。しかしながら、戦いの「機」だけ
を論じるのは、兵の大本を知っていると云うものではない。その理由は、兵の大本は
国家を経世済民（＝世を経^{おさ}め、民を済^{すく}う）するためであるから、治国安民（＝国を治め、
民を安んずる）の道を知らないのは、真の兵家とは云い難い。この故に大昔の聖人であ
る黄帝、堯、舜、禹、湯、文、武、周公は皆、軍の名人であった。その証拠は、黄に
握機があり、舜や禹には三苗、有苗の征があり、湯や武には桀^{けつちゆう}紂の放伐があった。

周公に司馬法があり、この他にも晋の六卿、魯の三家、齊の管仲といった輩が、平和
に治まっている時期には文によって国を治め、戦乱になれば戎車^{じゆうしや}に乗って征伐した。

このような人々は、文武一致であったがゆえ、大本を知っている兵法家と云うべきである。後の世になって文は文、武は武と別物になったので、それらが用をなすのも一つに偏って不自由になってしまった。その上、春秋時代にはすでに大本を忘却して宋襄の様な人さえいた。漢にも陳餘のようによく理解していない人が出てきて、聖人の道を借りて兵を誤ったことから、聖人の教えは兵の役に立たないものと思う人が多い。この考えは大いに誤っている。よって、こうした事をしつかり理解しているのを真の兵法家と云うべきである。七書の中でも、これらの事柄を述べているのは、太公望の『六韜』と黄石公の『三略』である。

孫子と呉子は戦いの機だけを論じ、太公望と黄石公の二子は文武一致の趣旨を論じている。 又

後世にこの境地に至ることができた人は、漢の二組、蜀の諸葛孔明、唐の太宗、我が

神祖徳川家康の他にはいない。これらは兵家第一の秘訣である。この境地をよく会得

したならば、平和な世においては廊廟ろうびょう(政務を執る殿舎)に居ながら、王や伯(諸侯の

長)としての業を興し、戦場にあつては兵士を率いて、臨機応変に戦え。このような

状態にあるのを、実に先王(昔のすぐれた君主)や聖人の兵と云うのである。ゆえに、

これ以下は国家経済の筋道を述べて、兵の心印(心に刻み付けるておく悟り)とするも

のである。さらに十分なものにすべく創意工夫を加えよ。こうしたことから、大昔

は「戈を止める」のが「武」と云うものだとされた。しかしながら、後世の兵の有様

であつては、「戈を止める」ことには成らないのである。後世の武ではただ単に、城

を落とし、人を斬り殺すことに勤めるのを優れた者とする。これは楚の項羽や木曾義

仲の類である。武と云えば武ではあるが、兵の大本には適っていない。実に一方に偏

った不自由な者であつて、先王や聖人が大いに忌み嫌うところである。そもそも武に

は神武、威武、凌武の三つがある。自分なりによく考察して工夫せよ。こうした考え

方は、世間一般の見解とは大いに異なっている。多くの人に考えてもらいたい。

○天下国家において主たる人は、経済の術を知らねばならない。ここでは経済とは、

「経邦濟世（邦をおさ経めて、世をすく濟う）」であって、「経」は道筋、「邦」は国である。

国に道筋をつけるのを「経邦」と云う。「濟世」の「濟」は渡すことであり、これを

あちらに渡し、あれをこちらに遣わすことである。「世」は世の中である。世の中の

人が住み易いようにしてあげるのを「濟世」と云うのである。先ず「国に道筋を付け

る」経邦」とは、士・農・工・商には士・農・工・商の道筋を付け、山沢・河海・田

野には山沢・河海・田野の道筋を付け、牛馬畜類には牛馬畜類の道筋を付けることで

ある。「濟」とは、第一に人々がその処ところを得るようにしてあげることである。例えば、

武士の気風が奢り高ぶって武備が弛むようであれば、奢りを抑えて、武備を引き締め

るように仕向け、或いは米や穀物が通常より高過ぎたり安過ぎたりする時には、その

値段を通常に戻すようにし、或いは武士が貧窮すれば富ますようにし、或いは商売の

利益が大き過ぎればその利益を抑えて利権を奪い、或いは地の利を尽くし、又は工商

の利益を取り立てて国を富ますようにすること等、全て世の中の人住み易いよう

に取り計らう事こそが「濟」の本来の意味である。この二つを統一して「経済」と云

うのである。さて、経済を具現する大きな考え方として二つある。封建制と郡県制で

ある。支那では夏、殷、周の三大は封建制であり、秦以降に郡県制となって、今の世

まで変わることがない。日本は古代には郡県制であり、今の世は封建制である。封建

とは国々に大名を建て置いて、その国の政治、処罰等はその国主ごとに任せて、朝廷

や幕府が処置することはない。郡県とは大名を建てることなく、国々へは朝廷・幕府

から国の守かみを遣わして、その国郡の政治や処罰を司らせるものである。封建の大名は

子孫が相継いで、幾代もその国を持ち続け、国の守は三年〜五年で交代することになっている。封建制は幕府が土地を分け与えて、大名と共に天下を守り、郡県制は土地を分け与えず、国々を役人に管理させて、天下中の政策を幕府の役人に実施させるものである。経済の大きな考え方は、この二つである。これら二つの制度の優劣を評価するのは、その時と場合によるのであって、むやみに優劣を論じるべきではない。そうは云えども、明が鞞鞞だつたん（＝タートル）に国を奪われたように、もしもその時に封建の大諸侯が数多あったならば、共に義兵を挙げて異民族の軍を討ち、烏金王をして支那の主にはさせなかつただろう。このケースに限定して見れば、諸侯が無かつたのが失敗だった、と云つたようなものである。又、国を統一しようとする人の立場から見れば、諸侯など無いほうが得である。そうであればこそ、この二つの優劣は、ケースごとの利害得失を論ずるべきであり、一般論として論ずべきものではない。さて、日本において経済ができたのは、多くは支那の唐代の制度を受けて学んでからである。そうであるから、天皇親政であつた大昔は郡県制で政治がなされており、それが長い年月続いていたところ、源頼朝卿が天下の権を取つて、初めて諸国に守護を置いてからは国の守りの威勢が日々軽くなつていった。その後、北条氏が執権として威を専らにしてから、いつの間にか戦国の機運が醸成されていつて、国々の守護は云うに及ばず、広大な莊園跡地を所領して大名と称する者から並み居る土地の名士に至るまで、誰が許すともなく、武勇次第、切り取り次第で所領することになってゆき、漸次に広大になつて、子孫が相継いでその土地を所有して、必然的に封建でもなく、又郡県でもないまま三百余年を経たところに、神祖・徳川家康が天下統一を成し遂げられて、全国の封境（＝国境）を正し、二百六十余人の大名を建てられた。これ以降は堂々た

る封建の世となった、ということである。さて又、十四卷目に述べたところの兵賦へいふ
（＝江戸幕府が文久元年の軍制改革で実施した軍役）の事は、軍法の大本であり、千言万語
は皆これに帰するのである。十分に考察すべきものである。今の世でも、軍役は国々
家々で定めてあるとは云えども、多くは大本を知らない人が作ったものであるから、
その法は粗略であり、精巧で詳しいものは少ないことから、用いるには不十分なもの
が間々ある。これらとは別に工夫しながら作って、制定せよ。大将たる人は、このこ
とをいい加減に考えてはならない。

○日本において名君、名将と称する者は、古代のことは論じないが、中世以降につい
て言うならば、源義家、鎌倉幕府を開いた源頼朝卿、源義経、北条時宗、北条泰時、
室町幕府を開いた足利尊氏卿、新田義貞、楠木正成、甲斐の武田信玄、越後の上杉謙
信、北条氏康、織田信長、太閤・豊臣秀吉、加藤清正等である。これらの名将らは皆、
拔群の功業がある人々であるが、何れも文武両全とは言い難い。その中でも、源頼朝
卿は大器である。一度鎌倉に馬を入れられてから、終身鎌倉を出ることなく、居なが
らにして全国の大名小名を帰服せしめ、終には国体を一変して、武徳によって天下の
主となった。こうぎよう鴻業（＝偉大な業績）と云うべきであろう。惜しむべきは世を早く去られ
てしまったことである。次に尊氏卿には大戦略の才能があつて、よく当時の情勢に通
じており、天下の武徳になびくべきであると理解して、抑揚や褒貶の機を失わなかつ
たので、義に反する行為や不作法が多かつたと云われているが、多くの人々が服属し
た。この二人の主将（源頼朝、足利尊氏）は作戦や戦闘指揮は下手であつたが、多く
の大名を自分の配下に置いた。いわゆる「將に將たる者」と云うべきであろう。この
故に、一度兵を挙げれば、天下は響くがごとく応じて、大業が速やかになされた。北

条時宗、泰時等は軍国の術者にして小徳に努め、小恵を行い、何よりも父祖の相伝が無ければ、どうして執権としての地位・役割を得ることができようか。ただし、時宗が元の使者の首を刎ねたのは一代の手柄であって、古今に稀有の英気であると称賛すべきである。源義経は小規模な戦闘で巧妙さを発揮して善戦し、敵を破った。中でも播磨でひよどりいえ鶴越を落とし、大風を冒して渡邊を渡ったのは絶妙であって、凡人の考えが及ぶところではない。そうは云えども、単なる戦闘の奇才であって、天下の主としての器量は無い人である。讒言に遭った後、奥州にうづくま蹲って一生を終えたことから、その器量がうかがい知れるのである。新田義貞はその性質が正直な勇将である。しかしながら、時勢に疎い人であった。ただ運に乗じて兵を起こし、一挙に北条高時を討って無双の戦功があったにもかかわらず、根回しに疎かったので、天皇からの寵愛、官職、禄高等全ての面で何の功績も無い足利家に及ばなかったのである。それにより不和が生じて終に戦に及んだのであるが、これ又自ら動かなかったので諸侯を味方にできず、孤立した將軍となって戦に負けてしまった。これは皆、才能がなくて足利家に計られてしまったのである。何と惜しいことであろうか。武田信玄、上杉謙信はどちらも名将にして、後世の大將たる人の手本となるべき人々である。ただ恨めしいことに時を同じくして出生し、互角の両雄が並立してしまったので、互いに力を伸ばすことができず、それぞれ一国で業を終えた人々であるが、その軍術は貴ぶべきであり、そこから学ばなければならぬ。織田信長は抜群の英雄にして、向かうところ敵なく、終に室町幕府(足利家)を襲撃して天下の盟主となった。そうではあるが、自らの剛強を恃んでしばしば暴虐や軽率な行いがあったので、諸將が心服せず、その偉業も半ばにして明智光秀によって弑せられた。これは威があっても徳がなかった

からである。楠木正成は元来、大将としての意気込みがあったにもかかわらず、その性質が信義に縛られていたので、すでに天下が瓦解する機運を察知しながらも、新田、足利の両将を超越して自ら天下を糾合するという才能を発揮することができず、居ながらにして大敵を成就させてしまい、その身は終に討死した。進退これ極まった時勢とは云いながら、今になってこれを見れば、その討死は甚だ無益なように思えてならない。ただし、子孫三代が四十余年にわたり本国を失うことなく、南朝を補佐し奉ったのは、実に正成の遺徳にして、楠木家の大きな勲功に違いない。加藤清正は、寛大さと勇猛さを兼ね備えた至誠至剛の武将である。人々はよく心服し、よく畏怖した。信義があり、威厳があり、智謀があつて、攻めれば必ず抜き、戦は必ず勝った。生まれつきの質朴さに任せて、当時の人情、風俗や習わしによるかんかつ姦猾（心がよこしまで、悪がしこい、ずるいこと）に一切与しなかつたので、平和に治まつた世情にあつては「圭角（性格や言動にかどがあつて、円満でないこと）」と呼ばれていたが、乱世にあつては真の英雄と云うべきであろうか。太閤・豊臣秀吉は、微賤から身を起こして、たちまち全土を掌握して天下に使令したが、世にこれを間然する（欠点についてあれこれと批判・非難する）人はいない。海を経て朝鮮を陥落させ、支那を震えさせた、その猛威は日本や支那に例がない一人である。惜しむべきは、攻め討つことだけに勉めて、徳恵を施すことなく、しかも不学、自意識過剰にして傲慢であり、治国安民に心を寄せることなく、しばしば婦人の言うことを受容れた。こうしたことから、逝去するとすぐに天下は神祖・徳川家康に帰したのであつた。

神祖・徳川家康が武徳を施して天下を統一された偉業は神妙にして、今に至るまで二百年来、全国が心服して戦乱も起こらず、遠い国々から来賓する（参勤交代のことか）。

実にこのようなことをなされたのは、開闢かいびやく（＝日本の国が始まって）以来ただ一人である。この統治を推し進めれば永遠に世の中は天地と共に長く続くことであろう。

○平和な時代が長く続くと、必ず華靡かび（＝おごり飾ってぜいたくを尽くすさま）を生じる。

華靡が盛んになれば、諸侯や士大夫したいふ（＝官僚・地主・文人）が貧窮する。貧窮すれば、武備も名ばかりで実用性がなくなってしまう。密かに思うに、現今のような世の中は、華靡が盛んであると云えるのであろうか。総じてこの条文に関連した意味深い話があるのだが、世に憚るので、ここには記述しない。以下、わずかに経済の大略を言及するだけに留めておく。さらに詳細にわたり自分なりの工夫を加えよ。ところで、国家を経済する上で要となるものに九つある。食糧・貨幣、礼式、教育行政、武備、制度、法令、官職、地理、章服である。そもそも人は食糧が無ければ死んでしまい、貨幣が無ければ物を流通させることができない。これゆえに食と貨を経済で最も重要な要素とするのである。すでに食えることができて、礼式が無ければ、人倫が明らかにならないので、開闢当時の人のようになってしまう。このゆえに礼式を立て、人倫を明らかにする。さて、人の道を立てても、それを学ばなければ智を發揮することができない。このゆえに学問に勉めて智を開かせるのである。この三つは人を立派にするのに肝要の方法である。武備は、軍陣の用意を忘れることなく、平和な世にあっても兵を治めたり操練等をして人馬に戦法をしっかり教え、又武器を削減せず製造し、修理することである。制度とは、物事に定式（＝定まったしきたり）があつて、天皇、大將軍の物事、諸侯、太夫、武士、庶民の物事には段階的に定式があるのを云う。これらは尊卑を分け、上下を明らかにする道理であり、かつ奢りを防ぐための術である。法令は、掟を制定しておいてその掟に従わない者を処罰し、島流しにして、

教令（＝教え戒めて命令すること）が廃れないようにさせることであり、一人を懲らしめて千万人を矯正する術である。官職は、この世の中の仕事が一人居だけで処理できるものではないので、諸々の役目を定め、人々を器量に応じて選んで、それぞれの職を授けて一つずつ処置させていくことである。地理とは、国土を寒暖、地表の厚薄、山、沢、河、海、高低、乾湿で区分して詳細まで考察し、寒暖、厚薄、山沢、河海、高低、乾湿の利を失わず、寸土たりとも無益なままで放置しておかないように、それぞれの対策を行なって、最大限に地の利を得ることである。章服は、尊卑に応じた冕冠（＝べんかん東アジアの漢字文化圏諸国で皇帝、天皇、国王などが着用した冠）や衣服にそれぞれの色分け、大小等があつて、姿を見て貴賤高下の身分を知り、混乱や無礼な振舞いが無いように講じた法である。この九つが経済を考える上での主だった基準となる。又その一つ一つに述べておきたいことがあるが、長文になるので筆記しない。ただし、押並べて言えば、経済は武備の根本、武備は経済の補佐であると理解せよ。本来、経済の仕方にも軍法の立て方にも、伝授と云うものは存在しない。ただ書物を読んで、和漢蛮夷（＝日本、支那や南蛮・東夷）、古今興廃の利害得失を観て、自ら知るのである。ゆえに『論語』に経済のことを述べて、「損益する所を知るべし」と言い、『史記』が兵のことに言及している中で、かくきよへい霍去病が「方略如何を顧みるのみ。古兵法を学ぶに至らず（作戦・戦闘がどのようなようであったかを分析・考察するだけでよい。古い兵法など学ぶ必要はない）」と言っているのは、その道に通じていると言うべきであろうか。しかしながら、支那はその人の性格が甚だ柔鈍である。ゆえに先王や聖人の兵法と云えども、理論は精密にして実行は拙いことがよくある。そうであるから、とうぐ唐虞（＝シナの伝説上の聖王である堯と舜、またはその治めた時代）以来三千年の間、北胡に襲われ苦しめ

られ、明の末期に至って終に韃靼だたん（＝タタール）に併合されて、頭髪を剃られ、衣服を替えられてしまった。これは軍理（＝軍の理論）のみを貴んで、戦いくさに弱かったからである。総じて軍理だけに執着するのは、戦に弱くなるもとなので、私が大いに忌み嫌うところである。今も軍事を学ぶ人は、絶対に支那流の軍理のみに陥ってはならない。又、日本諸流の軍書は、大半の事項が不足していて、軍事だけでも全く調っていないに等しい。まして況や文武兼備の事においてをや。このような時は柱にかわに膠にかわしたように、一つの流派のみに執着するのは拙いものとせよ。右にも述べたように日本、支那及びオランダ等の軍書を取り交え、文武相兼ねて自分なりの考えを加え、よく軍事情報を収集し、器械をも製作し、その上によく操練を実施しなければならぬ。しかしながら、操練のみに拘泥すれば、かつ又支那流に陥って、戦技（＝個人の武芸）に弱くなることがある。このことを心得ておけ。いずれにおいても戦闘の技術を上達させるのは操練にある。士卒が心気を強くするのは今日の政治にある。よくこれら二つの関係を斟酌して究極に至るようにせよ。これを「兵の心印」と云う。

時 天明六（一七八六）年丙午夏ひのえうま

仙臺

林

子

平述

私は以前『三国通覧図説』を著した。その書では日本の三つの隣国である朝鮮、琉球、蝦夷の地図を明示した。その意図するところは、日本の雄士が兵を率いてこの三国に入ることがある時、この図を誦そらんじておくことで適切に対応せよ、ということである。又この『海國兵談』では彼の三隣国及び支那、ロシア等の諸外国から海を経て侵攻してくる事がある時、防御すべき術を詳述した。ここにおいて初めて、我国内外の武備の術が調ったと言えよう。これは私が徳などどうでもよく、地位など眼中に無くして、生涯にわたり我国の武備を忘れなかったことによる。このため、「水戦」の一篇だけは可能な限り詳しく記述した。それ以外の篇は、ただ大綱を述べるだけに留め、詳細はそれぞれの者の流派に譲ってここでは言及しなかった。しかし、この書によって読者は文武の大略を知るので、平和な日には廊廟ろうびょうに居て王者の統治をなすことができる。戦乱があれば戦車に乗って征伐せよ。又、小にしては人々が武備と儉約の道を会得してその分を守るので、貧困を克服し、財が足りて日用品は乏しくなく、武器・弾薬はこれを欠かすことがない。これこそ、この書が当世に有益であるところである。しかしながら今や、学政（＝教育制度）は長い間廃れているので、世の人の多くは武に偏ってしまい、ただ武芸のみを身に付けている。この俗習が長きにわたったので、この書でも文武の意味を世俗的な言葉で述べ、書くにも（漢文ではなく）漢字かな混じり文にしたのであるが、それでも一冊の書物になると、俗人には理解するのが難しいものと思われてしまい、見る人も少ない。偶然にも読む人がいたならば、すぐに語りかけてこう言う。

「この書籍が素晴らしいことは間違いない。しかし、国のことを心配し過ぎる書であるとして、今の平和な世の中では敬遠されてしまうのだ」と。思えば人間の一生は六十年である。我一代さえ無事であれば、後は支那になろうとも、インドになろうとも、天に任せればよい、と言われる。悟り抜いた考えの様であるけれども、このように言うのは懦弱な者の逃げ言葉であつて、日本人として最も不忠不義なことである。かつ又、俗人の心情の通病であるが、自分の地位が尊ければ、貧賤をあたかも土芥つちあくたのように侮り、しかも賤者の能力を忌み憎んで、「彼は匹夫である。どうして大事を知ることができようか」等と誇る者が多い。これらの通病者は百人が百人、同じことをする。これすなわち当世の人情である。いわゆる「猿真似」或いは「自惚れうぬぼ」により物知り顔で、徳を計らず慎みを知らず、とりとめない言を発するだけである。妄りにいい加減な言を発して恥を顧みない人、これを何と言うべきか。人々はこのことを思え。さて又、私がこのように述べたり記したりするのは、世人と衝突して争うためではない。我意を傲慢に押し通そうとするのではない。ただ読者をして今か未来かを問わず、よく熟読玩味して「備」の字の本来の意味と節約・儉約の一端とを気づかせ、少しずつより多くの人々に文武両全の趣意を理解・周知させることで、海国として必要なこと、なすべきことをきちんと備えるように願うだけである。こうしたことから、私はこの思いが世人の耳に入り易いように願つて、あえて卑賤の身であることを忘れ、困窮を顧みずに言を今の世に発して警告しているのである。さて、自負するわけでもなく、狂言でもない

が、すでに首巻に述べたように、日本の武備を記した書物で、この『海國兵談』のように、自ら異国の人に面接し、遠く異国蛮夷の軍事情勢を知り、新たに奇計や妙策を尽くし、海陸全備の真に意味することを述べたものは存在しない。実に開闢かいびやく以来、未曾有の発明である。ただ読者諸兄は、私が貧しく賤しい身でありながらも直言することを咎とがめることなく、「良薬は口に苦しにが」の諺を思い合わせて、ひたすら熟読玩味すれば、上下大小各々その身分に応じ、文武の大意を会得して、貧しさを克服し、財も不足することなく、武力を展開することになる。これこそ今日において有益であり、海國に備える所以の大宝であって、徒に支那の書に基づき、空しく軍事の理論だけを論ずるような流派と同じようなものではないことを明言する。ただし、繰り返すが、読者は熟読玩味せよ。林子平自跋じぼつ（Ⅱあとがき）。